

鬼一法眼三略卷

菊畑の段

井戸と釣瓶はヨヤヨヤヨ、濡れようた中を、人が水汲みや音に立つトヨへ、水と柄杓はナヨヤヨヤヨヤ、波らさぬ中を、人が零して濡れと知る
今出川に名にし負ふ、吉岡鬼一法眼が一構え、非番の下部が掃き掃除、奥の花壇に色栄え勝る、菊の品々花盛り、打つ水玉を置く露に、紛へて虫やすだくらん。
仲居の木幡 走り出で、
「これ智恵内殿、お姫様お帰りの遅いをお待ち兼ね。気が付きた花御覧なされうと、お居間の庭から殿様がこゝへお出でなさるゝ。花壇の傍へ床几を直し、この褥敷いておかしやも」
と、言ひ散らして駆け入れれば、

介抱せられ、心勇みの駒下駄に、石踏み分けて花畑見廻しく、
「ム、ムウ咲いた咲いた。この花開いて後、さらに花なしと思へば、取り分け色香の身にぞ沁む。コレ、この菊は打ち水に露を含んで濡驚や。アカ程優しき花の名を、誰が石割と名付けゝん。主殿司と御垣守、二つ一つの大内山、天が下には隠れなき花の笑顔に打ち着せて、名は気押されぬ京小袖。たとへば花の物狂ひ、羅生門に棲む鬼なりとも、紐解き初むる大般若、御法の菊を見る時は、心和らぐ敷島や。されば彭祖が七百歳、姿を変えぬ若やかも、この徳なりと菊の露、我れも齢を延ばえんと、暫く眺め佇めり。
機嫌良く床几に腰打ち掛け、
「ヤイ、女子共、庭の掃除は智恵内めか。呼べ、逢はう」
「ソレ智恵内殿召しまする」
「ハツ」

「ナニ殿がお出でなさるゝ。ヤよい時の掃除仕当てた」
と、勝手へ走りひん抱かえて持つて出で、
「どこに置こうぞ、ヤこゝらに」
床几押し直し、
「ア、結構な蒲団ぢやな。不断この上に座つて冷えぬ様になされても、起こる病ひは是非がない。いつそ我れらが様に、へ、寒晒しの尻が増しかい」
と、ぶつゝく内に

駒下駄の音聞ゆれば、
「そりやお出でなされた」
と逃げ出づる、
切戸の内より女中の声、
「これくゝ智恵内、なんの御用のあらうも知れず、そこにゐや」
「ナイ、ナイ、ナイ」
と小陰に隠れ畏る。
吉岡鬼一法眼は、『病苦忘るゝ気晴らし』と、女小姓に

と答へて立ち出づる、
「花壇には塵一本も置かず、目の前の掃除は丁寧なれども、松、楓、白膠木などの辺りは、落葉も掻かず捨て置きしは、心あつてか、たゞしまた、目通りでないとと思ふ無精か。陰日向あつては後ろ暗し。以来を嗜み奉公せよ」
とありければ、
「ハ、これは殿の御意とも存せず、熊野の奥山家に無骨には育ち候へども、御奉公に陰日向は仕らず。総じて塵埃と申すものも、一二つ落ち散らばへばその座を汚し見苦しく候へども、また塵塚に山の如く集まる時は多くても見苦しくならず。それ故花壇の塵は取り捨て申せども、楓、白膠木などは落葉を御覧なさるゝが一興と存じ、わざと箒は入れ申さず」
と申し上ぐれば、
さすがの鬼一
「ヤこりや尤も。花壇は花壇の位によつて綺麗に掃除し、落葉の庭は落葉を愛して落葉を払はず。ムウ、名

將は士卒の賢愚、得失をよく弁へ、その器に応じて使ふといふ。軍法の奥儀もその理に同じ。尤も、ヤ尤も。ア、近う寄れ、小分別もある奴をなぜ智恵内とは名付けたよな。殊更熊野育ちとあれば懐かし、懐かし。我れも熊野の山家に鬼次郎、鬼三太といふ二人の弟あり」

「ム、さては殿のお生まれも熊野の山家か」

「ア、イヤ、弟も我れも出生は都なれども、兄弟引き別れ、弟が熊野に育ちしその起りは、我が親もかく言ふ鬼一も元は源氏譜代の侍なれども、六条の判官為義、左馬の頭義朝、御親子の中よからず、弓矢の道に背き給へば、源氏の滅亡遠かるまじと見付けし故、末の奉公せさせんと、三歳五歳の子を母に預け、誠めを残し、熊野の山深く忍ばせしその子は今の鬼次郎、鬼三太といふ我が弟。まつた某を近く召され、『汝はともかうも世にながらへ、源氏の成り行く末を見届け、大将の器に備はり給ふ人あらば、伝来の虎の巻を伝へよ』と、その身は御親子の御身持ちを

「ソレお煙草と御意遊ばす、早うく」

と取り伝へ、煙に憂さを吹き交せて、花に余念はなかりけり。

こゝに源氏左馬の頭義朝の八男牛若丸、御母常盤の懐を離れ鞍馬山、東光坊の御許に忍びて人と成り給ひ、十六年の春も過ぎ鶯の錦は着つれども、いつ会稽に翻さん、袂も狭き下司奉公、心は天下を取り挫ぐ鬼一を主に田面の雁、翅にかけし文ならで、

「直きに申し上げたき御用、虎蔵罷り帰りし」

と、切戸の口に躡へば。

「娘はまだ帰らずか。なんの用事氣遣はし。ア、近う寄れ。言へ、聞かん」

と氣を急げば、

「さん候姫君様、清盛公の御前をお立ちなされ私を召され、『これより直ぐに重盛様へ往かねばならず。父上のさぞお待ち兼ね、先へ帰り清盛公の仰せには、病氣を構はず虎の巻は明日中に差し上げよと、以ての外の不機嫌にて、鬼次郎、鬼三太と申すお尋ね者、こ

憤り病ひの床に身罷り給ふ。ヤ思はぬ昔語りに涙が零る。病ひの障りもう語るまい。あなかしこ、人に洩らすな」

と、ありければ、

『我れらその鬼三太清悦』と言はんとせしが、心を鎮め手を支へ、

「お家にありながら初めて承つたる御兄弟の御別れ、さこそ思し召すらん。さて、只今にもかの鬼次郎殿、鬼三太殿、それと名乗つて来たり給はざいかゞし給はん。恐れながら」

と伺へば、

「それは鬼次郎、鬼三太が心にあるべし。『父の遺言で候』などと、源氏に心を傾け、平家に敵対う心なれば、縛り括つて清盛公へ差し上ぐる。サ、サ、なぜと言へ。鬼一が今の主君は清盛公、平家に身を任する我れなれば弟とて用捨はならず、言はぬとても知れたこと。もう根問ひ葉問ひせずとも、おのれも花を見よ。女共、久しく煙管に對面せず。一服呑んでみやうか」

これは殿に御縁ある御方故、湛海を追付け遣はされ、厳しく御詮議ある筈と、直きに申し上げよ』との御事」と、聞きも敢へず、

「ナニ、鬼次郎鬼三太が御詮議。ムウ」

『ハツ』と驚く面色にて、吐胸ついて見えければ、

智恵内は我が身の上、びつくりせしが、

「これ虎蔵、その鬼次郎鬼三太と申すは殿の御兄弟、何故の御詮議。都には金売り橋次、橋内といふ者あり。もしそれが名を聞き違へ、鬼次郎鬼三太と申し誤りではないか」

と、念を入るれば

法眼、

「イヤ、虎蔵が誤りにあらず。思ひ当たることあり。

かの兄弟、兼ねて源氏に心を寄すると聞きしが、必定その詮議ならん。ガそれはそれで知らぬで済む。ヤイ智恵内、ソレ虎蔵めをこれで打て」

「エ、」

「イヤサ、打つて打つて打ち据えよ」

と、突いたる杖を投げ出だす、

「とは何故」

と、仰天すれば、

「ヤア何故とは、これ程の不奉公気が付かぬか。すべ
て奉公する身は、高きも賤しきもそれぞれに勤むる役
あつて、その一色に疎からねば、不調法者とは呵ら
れず。まづ、虎蔵めが今日の役目は、娘が初めての出
仕、草履掴むがサ役ならずや。『このお使ひは先払ひ
の衆か、押さえの衆に仰せ付けらるべし。重盛公へ御
参とあらば、なほ以て御草履仕らん』とサナ、
なぜ言はぬ。六波羅の玄関、一門の御所の案内、とつ
くと見覚え、すはと言は、晴れの草履。ひつ掴まんと
思ふ性根はなく、役目を捨て、帰りし不忠者。打てと
言ふが誤りか」

「ア、イヤ、皆御尤も。その気の付かぬは、年端のい
かぬ故御堪忍。これ虎蔵、罷り出でお詫び申せ」

「言ふなく、詫言聞かぬ。誤りでなくば智恵内、打
て」

「ハア」

『ハツ』と杖は取りながら、打ち兼ねて立ち兼ねる、

「ヤレ打て」

「ハア」

「なぜ打たぬ」

「ハア」

「おのれも主の詞を背くか」

「ア、イヤ、背きは仕らず」

「仕らずば、打ちのめせ」

「ナイ、ナイ」

とばかり立つあつ、とかく得打たず身を藻掻く。

「その杖寄せ。主の詞に背くは虎蔵が不忠の百倍、

おのれから叩きのめらしてくれん」

と杖振り上げ給ふところへ、

皆鶴姫立ち帰り、『これは』と縋り止め給へば、

「ヤア放せ、放せ、打ち殺す」

と、焦り給ふを

抱き止め、

「虎蔵を先へ戻せし不調法の起こりは私。お呵りなきさ

るゝ程身も世もあらぬ御堪忍」

「イヤ堪忍せぬ」

「是非御堪忍」

と詫ぶるところへ

表使ひ罷り出で、

「御直談ありたきとて湛海様御出でなり」

と、案内に連れて座敷に出で、

「ヤこれは先生、承つたるよりは御病気軽そうでまづ

大慶。庭に降りて何事のお世話なさるゝぞい」

「されば。家来めが不届き故、折檻を加ゆる」

と、聞きも敢えず、

「それ御覧なされ。先生は御病気、皆鶴は女儀のこ

と。しつかりといたした跡取りがない故に、家来共が

のさばるさ。弟子は子なり。某を皆鶴姫に娶せ名

跡を譲り給へ、とサ兼々申すはこゝのこと。後日の見

せしめ、その家来め、一々首をお並べなされ。ヤこれ

は内証、清盛公より急御用、仰せ付けられ参つた

り。密かに御意得たし」

と述べければ、

頭を下げ、

「師弟の儀は内証、御用とあれば上使同然。こゝは

端近、奥にて承はらん。女子共、御案内申せ。娘来

よ」

と手を引かれ、二足三足歩みしが、振り返り、

「ヤいおのれら、都の内は奉公構ひの暇をくれる。

出て失せい」

と、主命重き飛石を、伝ひて

奥に入りける。

後見送りて牛若君、

「ヤい鬼三太、汝も我れもこの姿に身を憂し、あらぬ

名を付きこの家に入り込みしはサなんのため。六韜三

略の虎の巻を伝へ受け、亡父の敵の平家を亡ぼし、

再び源氏の代に翻さんためならずや。鬼一が『打

て、叩け』と怒りし時、なぜ我れを打ち据えざりし

ぞ。打たれても踏まれてもこゝに足を止めてこそ、虎

の巻を手に入るゝ期もあるべけれ。この家を追ひ出され立ち寄ることも叶はずば、いつ本懐を達すべき。無念至極」

と、拳を握り心を苛つて見え給へば。

鬼三太大きに恐れ入り、

「ハ、御尤もの御悔み。その時その心の付かぬには候はねども、勿体なや、譜代相伝の主君を打つは天を打つ。いづくに杖を当て参らすべき。打ち叩かぬを咎めとて御刃にはかくるとも、僻事とは存すまじ。得打ち叩かぬ不調法は、真平御免下さるべし」

と、土に喰ひ付き詫びければ、

「ア、それも尤も」

「君も尤も」

「とにかくに、主も家来もか程まで源氏の運の拙さは」

と、主従目と目を見合はせて、忍び嘆かせ給ひしが。

鬼三太『ハツ』と心付き、

「申し、今日清盛が館の子細、『虎の巻を明日中

若を追ひ出ださん手立てよな」

「コハ、勿体なき御仰せ。名乗り合ひし兄弟ならば討つに心も怯れまじ。この鬼三太を弟と知らぬ兄を、手に掛けんは兄弟の道にあらず。恐れながら鬼一は君に振り向け我れら宝蔵に忍び入り、虎の巻を奪ひ取つて奉らんは、サアくくくいかにく」

「ム、ム、尤も」

と頷き囁き身を固め、心を定むるいつの間に、後ろに立つて細々を聞いて驚く皆鶴姫、何心なく

「二人の衆、まだここにかや」

とありければ、

二人は大きに敗亡し、

「イヤモ、ここに」

と返答も、詞しどろに胆騒ぐ。

皆鶴するくと立ち寄つて、若君の手をじつと取り、

「と、様が暇遣らしやんしても、この皆鶴が命に代えて詫言し外へは遣らぬ。これ程に思ふてあるにつれないぞや。あの人を頼んで雨の降る程遣る文に、よう

に差し上げよ。鬼次郎鬼三太が詮議に湛海を遣らん』とな。ア、アレ奥に湛海が密談は極つて我れらの身の上。うかく泣いてあるところでなし、我れらも分別、君も御思案なさるべし」

「イヤサ、この期に及び思案とは手緩し手緩し。虎の巻を納めたる宝蔵の案内我れよく知つたり。忍び入つて盗み取らん。汝は八方に眼を配り、咎むる者あらば一々斬り伏せ湛海ぐるめ。鬼一とて用捨すな。心得たるか」

と宣へば、

「ア、イヤく、鬼一を打つことは御免なれ」

「ヤア御免とは、怯れたか」

「いつかな怯れはいたさねども、鬼一は我れらの兄なれば、御免」

と申すを

言はせも立てず、

「ヤア、義によつては親兄の首を取るも勇者の習ひ、それ知らぬ和主でなし。たゞしは鬼一と心を合はせ牛

返事しやらぬの。たゞしは女子に惚れらるゝが嫌いか、嫌ひならこの様にどこもかも、惚れられる様に可愛らしうなせ生まりやつた。そなたを退いて殿御とて、外には持たぬと心で心、括り枕の仮り寝にも、忘るゝ隙はないわいの。と、様は湛海殿と密々の物語り、女子共にも合点させ奥にはちつとも氣遣ひなし。コレ智恵内、仲人は宵の程、コレそちら向いてみや。サア今の内つい来てたもいの」

と、引立つる。

「ア、アレ悪いことばかり」

と手をもぎ放し、

「お前はお主、拙者は家来。数ならぬ身をそれ程に可愛がつて下さるは、ノウ智恵内、忝いことなれど眞加ない、御赦されませ」

「イヤく、数ならぬとはいかい偽り。智恵内といふは伯父の鬼三太様、お前は源の牛若君」

と言ふ口を

鬼三太駆け寄りちやくと押さへ、動かせず、

「さては最前より立ち聞きしそれと知つたるな。外へ洩れては大望の御妨げ、伯父姪初めての見参、不憚に思へども君の大事には代へられず我が手に掛くる。恋慕ひし君のため捨つる命惜しかるまじ。未来の契りを観念せよ。南無阿弥陀仏」

と取つて引き寄せ、刺し殺さんとせしところへ、湛海すかさず飛んで出で、鬼三太を引き退け突き退け皆鶴を後ろに押し囲ひ、

「ヤどこへく。湛海が身にも代へぬ大事のこの姫を殺そうや。ヤそうはなるまい。牛若、鬼三太とおのれと名乗る業晒し。清盛公へ注進申し御褒美にはコリヤこの娘を抱いて寝る。者共館の四方を囲み取り逃すな」

と皆鶴を引立て駆け出づる、

やり過して牛若君、後ろより抜き打ちに、ばらりずんど切り付け給へば

大袈裟切りといふものに、二つになつて野垂れ伏す。

「ヤアく鬼三太、皆鶴を殺害するに及ばず。牛若

賞翫し給ふも、平家を討たんず志、オ、しほらしや健気なり。これまでなりや僧正坊が通力自在を見給へ」

と、面曇をかなぐり捨つれば、誠は鬼一法眼なり、人々ぎよつと肝を消し、『これも天狗の障碍か』と、呆れ果てたるばかりなり。

鬼一しづくくと立ち出で、

「平懐に申すも憚りある昔語りなれども、元来鬼一が家と申すは、君の御先祖人幡太郎義家公に宮仕へし天野の某。故あつて吉岡と改め、御父義朝公まで奉公し源氏を離れず。今鬼一が伝へし虎の巻と申すも、かの六韜三略の書の御事なり。されば平治の戦ひは君も聞こし召し及び給はん。御父義朝公清盛に打ち負け給ひ、野間の内海にて御腹召され御公達も散り散りに、或ひは討たれ或ひは流され、これぞ源氏の大將軍と面を出だす人もなく。哀れ源氏の公達に器量ある人もがたと窺ふ内、君鞍馬山東光坊の許にて成長し給ひ、毘沙門堂の辺りの巖窟にて、兵法修行し給ふと

直々鬼一に逢ふて子細を語り、虎の巻を渡せばよし。否と言はゞ百年目、鬼一兵術の秘密を奮ふとも、我れまた鞍馬山の僧正坊に習ひ受けし、奥儀を尽くさば手の下に討ち取るは案の内。鬼一法眼はいづくにある、源の牛若対面せん」

と呼ばつて、間毎の障子蹴放し蹴放し踏込み給ふ一間の内、

奥は鞍馬の僧正坊、飛行の翼天狗の形、忽然と現はれ立ち給へば、

「ハ、ハア」

と飛び退り、

「思ひ掛けなや師の御坊。何故来臨し給ふぞ」

と、謹み頭を垂れ給へば、

皆鶴も

鬼三太も、渴仰希代の思ひをなし、恐れ入つてぞ敬ひける。

僧正団扇を上げ給ひ、

「善きかな善きかな牛若丸、姿も心も荒天狗を師匠と

聞き飛び立つ如く登山し、何卒鬼一といふ名を包み教へんものと肺肝を砕き、娘にも宿願ありと偽り、毎夜々鞍馬山に分け入る。その頃君はまだ十歳に足らずの、稚き御目を眩ます鞍馬山の天狗、僧正坊と名乗つて相手になり、兵術を授け教へしを、真実の天狗と思ひ給ひしか。これこの面を被りし僧正坊、誠は鬼一法眼が仮に似せたる形なり。必ず必ずかく言ふ話はこの座限り。君天下を知し召しての記録にも、『牛若が兵法は僧正坊といふ天狗に習ひし』と書き記させ、末世末代鬼一といふ名を深う包み隠してたべ。くれぐれ頼み存ずる」

と、初めて明かす物語り、

驚く心に先立つて、若君涙留め兼ね、

「有難しとも忝しとも礼に對する詞はなし。鬼一殿」

と大地に額を摺り付け給へば、

鬼三太心は飛び立てども、兄の心を量り兼ねて出もやらず、

娘は賢しく、

「それ程のお心ならば、とてもことに虎の巻を、牛若様へ進めて下され、と々様」

と、背撫で擦り機嫌取る。

「イヤく、平家の糧を喰らう鬼一が、今とても源氏へ虎の巻は譲られず」

と、懐中より取り出だし、

「ヤイ娘、これはおのれに譲るぞ。若い奴のことなれば心を掛ける方もある筈。これを土産に思ふ方へ嫁入りせよ」

と手に渡せば、

嬉しさ親の前とも恥ぢず、兼ねて心を繋ぎ置く、牛若君に奉り『合点かやいの』と目で知らず、

若君押し戴き懐中し、

「この年月僧正坊となつて剣術を教へ、今また息女に虎の巻を与へ給ふ。牛若娶り夫婦となり、奥儀を授かる上は平家を亡ぼし、世を源に返すこと、掌に握つたり。この身を百千に砕いてもこの大恩、いつの世に報ずべき鬼一殿」

と、涙と共に宣へば、

「ヤア紛らはしい。鬼一は平家、源氏方の礼を受けて立つべきか。たゞいつまでも天狗々々と言ふてたべ、花智殿。世に便りなき天狗が娘、分けて御不憫頼み入る。言ふべきこともこれ限り。娘、鬼三太、若君の御供し早や落ちよ」

と、言ふより早く差添ひん抜き、太腹にがはと突き立つる、

娘は驚き『ワツ』と詞も泣き出だす、

二人も左右に抱だき付き、刀を奪ひ取らんとすれども

ちつとも放さず、

「ヤアとても切りかゝつた腹を止めてナ、ゝゝなんとする。命ある内は平家の鬼一、汝は源氏の牛若丸、介抱に預かるべきか。汚らはし、こゝ放せ」

と突き退け突き退け、

『エイ、ヤツ』と引き廻し、苦しき息をほつと吐き、

「ハゝア返すは返すは。木は木、火は火、水は水、只今返す断末魔。平家の禄を喰らひ込んだこの腹も、切

つて返せば五臓六腑に恩も残らず、魂は元の源氏、また立ち帰る今生の忠義の納め。一度天狗になつたる鬼一、魂は冥途に赴くとも魄は魔道に分け入つて、再び誠の天狗となり、西海四海の合戦といふとも、影身を離れず弓矢の力を添へ守るべし。さうば、さう

ば

「ハツ、ハツ、ハア」

返す返すも情けある程身の冥加、弁へ知らぬにあらねども義理に引かるゝ牛若君、後を見捨てゝ出で給へば足もしどろに皆鶴姫、翼萎るゝ別れの露

鬼三太一人が心を鬼、鬼の目にさへ涙の雨の、ふる手を引き立て介抱し、泣く泣く出づる出世の門、文字に二つはなけれども、

「我れは出世」

「父はまた、この世を出づる菩提門」

「門々不同、八万四為滅無明果業因、利劍即是弥陀号」

と、三人一所に立ち並んで、

「願以此功德往生は、安樂国にてこの四人、必ず一蓮托生」

と、心を残して出でゝ行く